

平成23 (2011) 年4月1日

第25号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀文化

浦賀海道と渡船

横須賀市道二〇七三号線

市内唯一の海道を、渡船が航行している浦賀湊は、全国でも大変に珍しい。

平成十年（一九九八）に、横須賀市が航路「横須賀市道二〇七三号線」の愛称を募集し、多くの公募の中から選ばれたのが『浦賀海道』です。

市内唯一の海道は、大正九年四月一日（一九二〇）に道路として認定されました。全国では、大阪市、静岡市、鳴門市などが海上を道路として認定していますが、そう多くはなく、大変に珍しいといえるでしょう。現在この航路を運航しているのが愛宕丸で、約二百三十三メートルの海上を僅か三分足らずで航行します。そして、乗客が一人でも対岸にいれば、直ぐに迎えに来てくれます。料金は大人百五十円、小中学生五十円、荷物（自転車など）五十円となっております。休航は、十二月三十一日から一月三日の間と、悪天候時及び点検修理日です。

七二二の記録には、「当村には、渡船無御座候」とあり、十一年後の享保十八年（一七三三）に書かれた『東浦賀村明細帳』には、「渡船の修復の折には、鴨居村、走水村、内川新田、八幡村、久里浜村、すべての家で一軒あたり一年間で米六合ずつ」とあるので、享保五年（一七二〇）浦賀奉行所が設置された直後に開業したと思われるのですが、特定はできません。当時の浦賀村には、東西合わせて約千軒の家があったので、米の量は約九百キログラムで、お金に換算すると六両ほどになりました。渡船は二隻と思われるので、二人の船頭の生活が支えられるように決めたと考えられます。その後、明治元年（一八六八）の記録では、一軒あたり一律いくらではなく、家の収入に応じて負担しています。

明治十一年（一八七八）に公営交通として、渡船は一人三厘で、夜間はその倍額と定め、朝六時から夜十時までの営業としていました。この時期から大正期にかけてがもつとも多い時で、一日約千人の利用者があったとされています。大正五年（一九一六）まで、浦賀の十七町（現在の町内会組織）が共同経営していましたが、翌年に浦賀町営となり、町は渡船の利権を十七町から五千円で譲り受け、五年間の分割で支払いをしました。昭和初期の頃は渡し船専門で、櫓でこぐ伝馬船でした。昭和十八年四月一日（一九四三）に、浦賀町が横須賀市と合併し、市営となり、昭和二十四年（一九四九）以降は民間に委託し、今の船（愛宕丸）は、平成十年八月九日（一九九八）に就航しました。木造船から、江戸時代の「御座船」をイメージした強化プラスチック製の船になっています。最近では、年間約二万四千人の方が渡船を利用してはいますが、昔に比べると利用者は少なくなっています。

この春の季節に、船上から愛宕山や周囲の山々を見上げると、桜や新緑が眩しいまでに美しく、何とも云えない気分となり、いついつまでも、浦賀湊で愛宕丸が航行してほしいと願うものです。



◆◆渡船 愛宕丸◆◆

江戸時代から航行している渡船 伝馬船から姿は変わりましたが 風情はそのままに...



参考資料

- 浦賀地区「古老のはなし」
- ヨコスカ開国物語

山本 詔一著

○歴史のまち浦賀散策の手引き

（改訂版）



歴史語りい座・浦賀二十

郷土史家 山本 詔一

●寛政の改革と浦賀●

天明二年（一八七二）の冷害で始まった飢饉は、東北地方での被害が特に大きかった。その翌年には浅間山が噴火し、冷害に合わせて噴火の被害が人々の生活困窮に拍車をかけた。この時幕政を担当していたのは、田沼意次であった。

田沼と聞くと「ワイロ政治」を思いうかべる人が多いことでしょうが、最近では農業政策だけに頼りすぎ、年貢も思うように徴収できなくなってきた時代に、商業政策を見直し、これからの幕府政治が向かうべき方向性を示した人物として評価が高くなってきている。

しかし田沼が天明六年（一七八六）に、十代將軍の家治が亡くなると、政権を追われ、その後を担ったのが松平定信であった。

政権が変わっても人々の生活には何らかわりなく、かえって飢饉の影響が都市部にも及び、天明七年には全国の都市で「打ちこわし」が起こった。東浦賀の「石井三郎兵衛家文書」の第一巻には、江戸で起こった「打ちこわし」の様子を「近国・近郷の悪党が入り込み、商人や金持ちをねらって言いがかりをつけ、家財

道具をこわし乱暴狼藉を働いている。この者たちが手にあまる行動に及んだ場合には、けがをさせても構わぬとまで言い、それは地元の人であっても同様である。もちろん徒党を組むことは絶対にしてはならぬことである」と記している。

また、浦賀での米の売買は、江戸の米が底をついているので、しばらく控えるようにしていたが、これからは自由にしようといいたが、これは自由にしてよろしいと通達があったが、奉行の用人から「あまり派手にやらぬように」との注意があった。

これだけみても江戸には不足していた米が、浦賀にはたつぷりとはいえないが売買できるだけの量があったことを窺わせるものである。

政権を担った松平定信は、田沼の政策を一新し、祖父八代將軍吉宗の政治を理想とし、飢饉で危機的状態にあった財政基盤を見直し、ゆるんだ風潮を引きしめて幕府の権威の再建を試みた幕政の改革に着手した。この改革を「寛政の改革」と呼ぶ。

いくつかの政策が実行されたが、その一つに飢饉に備えて社倉・義倉を造らせて米を蓄えさせた圃米（かこいまい）があった。

浦賀でも材木はやるから、米蔵を

建てるようにと指導された。この提案は一見するとよさそうだが、材木以外の人や品物は村の支出になるので、村に負担がかかること。さらに浦賀は場所が狭いので、新たな蔵をどこへ建てたらよいか。商人が使用している土蔵でその肩代わりができないものか奉行所へ相談にいつている。はたしてこの備蓄米を入れる蔵は出来たのでしょうか。



◆「鏝絵を学ぶ」講座開催のご案内◆

5/21～6/18（毎各土曜日）9:00～12:00の全5回「鏝絵を学ぶ」と題して講座を開催致します。浦賀の鏝絵めぐりや鏝絵作りに挑戦してみませんか？詳細は、浦賀Today3月号、「広報よこすかお知らせ版」3/25付等をご覧ください。締め切りは5/6（水）必着です。往復はがき又は返信用はがき持参で窓口までお申し込み下さい。応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。（定員20名）

お問合わせは当館までお願い致します。

◆歴史講座開かれる◆

1/9日～2/16日の水曜日全5回にわたり「浦賀志録を読む」と題して山本詔一先生（横須賀開国史研究会会長）をお迎えし、歴史講座を開講致しました。貴重な郷土資料として復刻された「浦賀志録」を通して、明治から大正にかけての浦賀周辺の様子が、様々な視点で語られ、楽しい講座となりました。多数の応募もいただき感謝申し上げます。次回も皆様のご希望にかなう企画にしたいと考えております。



講座の様子

今年も風ひかる新入学の季節がやって来た。山国の未だ肌寒い昭和三十四年の春、少年は漠然とした希望を抱きながら中学へ入学した。ごましお頭の担任との初対面であった。師は級の皆を前に「こう言い放った。「鐵（てつ）は熱いうちに打て！」と。「少年老い易く・・・」か。新中学生への熱い囁（はなむけ）の言である。春になると、ふつと思ひ出す。あのはあるが可愛いかわ過ぎた。然しなお、鮮明に記憶している。師から幕末期の出来事を思い出した。ここ浦賀の地、郷土資料館に居る奇遇に驚いている。師は疾うに彼岸に旅立っている。冥福を祈りつつ、鐵は少しばかり冷えているやも知れないが、郷土の偉大な先人たちに、いま一度、こころを馳せてみようか。未だ未だの明日の希望のために。そう想っている。

笑話一題

時世間知らずで生意気な少年は今、既に還暦その声が聴こゆるほど社会科の先生であったなど教えて貰ったこと